

伊勢神宮の御師廃止と参宮者の 関係性再構築に関する調査研究 ニュース・レター

科学研究費助成事業〔基盤（C）〕、研究代表者：櫻井治男、課題番号：26370072

No.3

平成 28 年

(2016)

3 月 30 日

禁無断転載

皇學館大学文学部櫻井治男研究室

516-8555 三重県伊勢市神田久志本町 1704

● 目次	●
調査報告（4）山口大神宮・同遥拝所を訪ねて.....	櫻井治男・八幡崇経 3
神宮文庫所蔵 近代の伊勢神宮参宮記念名簿について.....	八幡崇経 7
平成 27 年度実績報告概要.....	櫻井治男 8

調査報告（4）

山口大神宮・同遥拝所を訪ねて 櫻井治男・八幡崇経

山口大神宮は、永正 17（1520）年に大内義興が後柏原天皇の勅許を得て、伊勢の神宮（皇大神宮）から分霊うけたことに淵源を持つ神社として知られている。永正 16 年（1519）に外宮、翌 17 年に内宮を造立し、引き続き同年に外宮御師高向二頭大夫により勧請の式が行われた。昭和 22 年までは「高嶺太神宮」もしくは一般に「太神宮」と呼ばれていたのを山口大神宮と改称されたものである。¹

かつて「今伊勢」とも称され、現在では「西の伊勢参り」の地として情報発信される場所である。

当宮は、中国・九州地方一円から訪

れる人々で賑わったとも言われ、また九州の伊勢参宮道者が記録した近世の道中記類にも、伊勢への往還途次に立ち寄っている記述が見られるところから、本研究でも注目対象とした。

○

調査は、平成 27 年 8 月 30 日～31 日にかけて、現地の状況確認と伊勢信仰資料の把握につとめた。30 日に櫻井治男・八幡崇経が山口大神宮小郡遥拝所（山口市小郡下郷 710 栄山公園隣接）・山口県文書館（山口市後河原町）を訪問、31 日は櫻井・八幡に加え齋藤平・谷口裕信の 4 名で、山口大神宮（山口市滝町）、今八幡宮（山口市八幡馬場 22）、野田神社・豊栄神社（山口市天花丁目 1-1）、及び山口大神宮「台道村遥拝所の灯籠」と小俣八幡宮（防府市台道 1143）を巡った。以下、山口大神宮及び同遥拝所関係 2 か

¹ 山口大神宮式年遷宮奉賛会『山口大神宮誌』（昭和 35 年）

所について報告する。

○

江戸末の文久2年(1862)、長州藩は、城を萩から山口へ移し、柳井田と勝坂に関門を設け、外国軍の侵入、幕府や他藩の者に内情を探られることを防止しようとした。そのために一般人は山口への自由な往来が出来なくなり、山口大神宮の参拝も不可能となった。

そこで文久 3 年(1863)にいち早く山口の東側の山陽道沿いの台道村庄屋内田利兵衛により、遙拝所設置の要望書が出された。一方、山口の西側にあたる山陽道沿いの小郡津市の商人たちからも、遙拝所設置の嘆願書が出された。これらはどちらの地も関門設置により山口大神宮への参詣者が激減したことによるとされている。翌元治元年(1864)、山陽道の台道村に山口の大神宮内宮の遙拝所を、また約7km西に離れた小郡村下郷に外宮の遙拝所が地元の人により建てられることとなった。² 報告によると遙拝所はこれら以外に吉敷、平川、大内、宮野、仁保、秋穂、丸尾原等にもあったといわれるが、吉敷と丸尾原以外は不明とされている。³

山口大神宮小郡遙拝所

(山口市小郡下郷 710 栄山公園隣接)

山口大神宮の小郡遙拝所(外宮)は、新幹線新山口駅の北西約 1 km、また旧山陽道からは北西約 600m、禅定寺山

² 広田暢久「山口大神宮台道・小郡遙拝所の建立」(『山口県神道史研究』山口県神道史研究会 平成9年)

³ 新造文紀「防長の『お伊勢さん』について」(『くすのき文化』59 楠文化協会 平成19年)

の東麓にある。遙拝所は南向きに鎮座



小郡遙拝所関係地図

し、南側の小川を挟んだところには紅葉で有名な栄山公園がある。

少し下の池のそばには、高灯籠と角柱の道標がある。高灯籠は、天保 11 年(1840)、山口の大神宮の道標として津市下(ついちしも)の旧山陽道沿いに設置されていたが、昭和 30 年に現在地に移設されたものである。また、角柱の道標は、元治元年(1864)、山口の大神宮の遙拝所が創建された際に、津市下の旧山陽道沿いの楼門とともに「大神宮遙拝所」の道標として設置されていたが、昭和 30 年に楼門は取り壊され、道標だけは現在地に移設された。



角柱の道標



高灯籠



遙拝所の施設
本殿・中門・神門は市指定文化財



本殿は神明造り（外宮様式）

遙拝所は、神明造り(外宮様式)銅板葺きの本殿と中門が石の玉垣で画され、少し南に離れて神門が建つ。三棟は現在山口市の指定文化財となり、平成6年に補修され、現在に至っている。施設の維持管理は、山手地区の人が行っている。

境内には、元治元年(1864)の灯籠、明治元年の玉垣奉納の願主名録碑や明治7年の灯籠などがある。また、遙拝所以前のもので、宝暦8年(1758)に廻船中が奉納した灯籠があり、遙拝所の

境内は、以前別の施設が建てられていたのかもしれないが、経緯は不明である。

台道村遙拝所

(防府市台道長沢津山)

山口の東側に設置された「台道村」のもう一つの遙拝所は、現在防府市の西端、山口市と隣接した台道（だいどう）地区にあたる場所で、山陽道（現在の国道2号線と重なっている部分）から北に入った場所であるとされる。



台道の遙拝所関係地図
(防府市台道)

その入口にあたる場所には、現在も自然石で出来た灯籠が残されている。大きさは異なるがどちらも「献灯」と彫られ、一基は「慶応二年丙寅正月当町中」、もう一基には「明治二年己巳正月、朝改御一新更為□□当町中」と刻み込まれている。

実際の社殿の場所は、「現在は雑木が生い茂り当時の社殿は跡かたもない」とされ、今回の調査では場所までは確認できなかった。



防府市台道の遙拝所への入口の灯籠
後ろは国道2号線 左は防府方面

○

さらに遙拝所境内にあった灯籠については、上述の旧山陽道からの入口にあった灯籠の場所から、旧山陽道を防府方面へ300m離れた市西自治会館東の招魂場(しょうこんば)の地に移されている。

招魂場とは、長州藩が元治元年以降、戦死者を祀った場所のことである。現在、宗教法人に登録されているものとしては25社あると確認されているが、登記されずに確認できないものもあるとされ、当地区の招魂場もその一つであると考えられる。



台道の遙拝所の灯籠
(防府市台道市 巖島六社境内)

しかしこの施設の階段下にある天保3年(1832)建立の「巖島六社大明神

碑」の碑文によれば、元禄3年(1690)に巖島六社を勧請したが、社が傾いた事と元の場所が遠かったために寛政9年(1797)に現在地に移転再建し、さらに文化11年(1814)に堂宇を一新して階と垣を整備したと記されている。このことから招魂場は同社にその後併設されたと考えられる。調査時に地元の人に聞き取りをした際にも、「招魂場」は知られていて、現在でも一般に認識されている施設であった。



防府市台道の招魂場(巖島六社)



巖島六社の由緒を記す石碑
(天保3年建立)

さて、旧山陽道から登った階段上部左右に、「永照」「元治元年甲子六月」と記された、小郡の遙拝所に設置されているものと同一の灯籠が2基、また「揚輝」の名前が刻まれたものが1基

残されている。

山口大神宮

(山口市滝町 4-4)

山口大神宮は、高嶺城跡のある鴻ノ峰の東山麓、現在の山口県庁の西側に、五十鈴川をはさんで南向きに鎮座している。参道入口正面の鳥居は、寛文3年(1663)に長州藩主毛利綱広の寄進。また左側の道沿いには、江戸中期から盛んになった日参講による、参拝一万回成就記念の石柱が寛延元年(1748)以降、8基残されている。



外宮の社殿



内宮の社殿

鳥居をくぐり登ったところの右側に社務所、その上の左側に通夜堂、さらに右側に神楽殿が建っている。本殿は、その神楽殿を右に曲がった階段を

登ったところに建っている。



階段上の敷地は、奥側が高くなっていて、左側手前に外宮、奥の上段右側に内宮が鎮座している。それぞれ遷宮のための同じ広さの敷地が隣接して



山口大神宮の鳥居と日参一万回成

空き地となっている。永正17年(1520)創建後の21年目にあたる天文9年(1540)に伊勢神宮と同様の式年遷宮が行われたが、その後は必ずしも式年通りには行われず、近年では、昭和35年に造替、平成12年に式年遷宮が行われた。

社殿は、外宮、内宮それぞれの形式の神明造りとして千木鯉木を載せ、棟持柱、回り縁を付属する形式となっている。

○

外宮の前には平たい石があり「粃置岩」と呼ばれ、稲粃麦種子を置き虫除け豊作を祈ったとされる。これは特に外宮のご祭神豊受大神の神徳による

と伝えられている。



外宮前の敷置岩

境内には通夜堂があり、これは夜に参拝する人のための施設だったが、現在では利用する人はいない。

○

山口の大神宮は、領主大内義興の信仰により勧請の後、毛利氏になっても社領を安堵され引き続き信仰された。社殿および式年造営の諸経費は藩の負担とされていた。氏子がいなかったため、一般の寄進は、防長二州だけでなく遠く北九州方面からも行われた。大内氏の時代から豊前、筑前、石見地方からの参拝者は多く、年末には御玉串曆本等を頒布していたと伝えられる。

ちなみに天保4年(1833)当時、長州藩内には下記の伊勢神宮の御師が廻村していたとされる。⁴

村山遠江、松村与一太夫、橋村八郎太夫、高向辻太夫、橋村右近太夫、三村権助太夫、檜垣左兵衛、林太夫、白木彦介太夫、横橋鎰屋太夫、谷一郎太夫、広辻勘解由

しかしこれらの御師と山口の大神宮とにどのような関わりがあったの

⁴ 伊藤忠芳「伊勢参宮と伊勢講」（『山口県神道史研究』山口県神道史研究会 平成6年）p34

かは今のところ判然としない。

北九州の豊筑地方では一生に一度は必ず山口の大神宮に参拝せねばならぬとか、山口の大神宮に参拝した娘でなくては嫁にもらわぬとまでいわれたとされる。⁵



日参一万回成就碑



社殿敷地の全景 左手前が外宮 右奥が内宮

○

山口の大神宮は、明治6年3月、県内郷社13社の一社となり、昭和4年に県社に昇格した。昭和22年に、それまでの「高嶺太神宮」を「山口大神宮」と改称して現在に至っている。

現在の山口大神宮の信仰状況について社務所で聞き取り調査を行ったところ、昔から氏子組織が無いため、崇敬会組織として維持運営が行われている。また現在、県内には山口大神宮だけの伊勢講組織は無いとのこと

⁵ 同上『山口大神宮誌』p35

である。ただ今でも九州地方からの参拝者は多いとされていることは、近世以来の伊勢信仰の名残と思われる。また近年では、伊勢神宮の遷宮で参宮した人の話から、山口大神宮のことが再認識される傾向にあるともいわれている。



山口大神宮での調査風景

神宮文庫所蔵

近代の伊勢神宮参宮記念名簿について 八幡崇経

ニュース・レター№1で紹介した「中川采女家旧蔵伊勢神宮参宮記念名簿」12冊について、平成27年度には画像のデータベース化と内容の分析を行った。また同様の資料の存在についても神宮文庫を含め調査を行った。

中川采女家旧蔵資料の特徴は、江戸末の慶応元年から昭和18年までの70年程の間、内宮御師中川家を頼って参宮した、主に北部九州各地からの人々について、日を追って知ることができることである。特に、詳細な住所を特定でき年齢が記録されている部分も多く、近代における参宮者の具体的な動向を研究する上で貴重な情報が含まれているといつてよい。

そこで同様の資料の存在の有無について神宮文庫で調査を行った。結論から言えば、同様の内容を含む檀家帳、参宮名簿、止宿帳で、継続した内容の資料と認めることの出来るものは無かったが、興味深い資料もあり今後さらに詳しい調査が必要と思われる。

橋村主計家文書 1門 13419号 27冊

これは外宮の御師橋村主計家の檀家関連のものである。江戸期の筑後国(福岡県)関係の資料が10冊、近代の豊前、筑前、筑後、肥前など多数の国の資料が17冊である。神宮御師資料によれば、外宮権禰宜橋村正貫、通称主計は、筑後、筑前両国に檀家40,111戸を有していた。⁶ 明治2年以降の止宿帳、参宮人帳などの多くの国々の名簿は、御師廃絶の前後に併合したものと考えられる。明治13年迄の資料であるが、内容については必ずしも連続性があるものではない。

御祈祷姓名簿 1門 15489号 69冊

これは全体で69冊になるものであるが、中川采女家資料同様の江戸末から近代にかけての参宮資料としては、文久2年(1862)以降、昭和37年迄で17冊の祈祷姓名簿、参宮人名簿などの標題をもつものがある。「奥州御参宮人帳」以下、主に東北を中心に武蔵、下総両国までの広範囲に及んでいる。下総国の場合には明治10年から大正6年までが一冊となっているなど、資

⁶ 皇學館大学史料編纂所『神宮御師資料外宮篇3』(皇學館出版部 昭和60年) p44

料の連続性と云う点では、不足のように感じられる。また地域性という点でも、東北全域に及んでいるが分量としては少ないように思われる。また「神宮敬神御神楽会（伊勢山田町古市町）」とする資料が含まれている事から想像されるのは、御師廃絶後に複数の御師の檀家を引き継いだ新しい組織による参宮客の止宿名簿という性格があるように感じられる。この資料群の中には参宮者の名簿だけで無く、「国廻報告」や「封書年賀帳」などの資料もあり、近代における御師制度廃絶後の参宮客への対応状況や、地域とのやりとりなどを知ることでできるものも含まれていて、岩井田家の資料とともに近代の参宮を知る上で今後資料の精査が必要であると思われる。

以上、神宮文庫の資料調査によれば、近世から近代にかけての参宮客の動向を知る資料としては以上の2部があげられ、中川采女家の参宮資料を理解する上でも興味深いものと云えよう。

平成 27 年度実績報告概要

櫻井治男

本年度も前年度に引き続き、旧師職・中川采女家の資料に基づいて、近代における伊勢信仰の持続と変容について下記のような資料整理と調査分析を進めた。

①中川采女家の資料をデータベース化し、年代と地域分布の分析のための基礎資料として整備を進めた。

②データベースを元に、近代における伊勢参宮者の動向を明らかにする福岡県宗像市での事例を調査した。また福岡県下にお

ける絵馬の悉皆調査の報告書を元に、絵馬奉納の動向もあわせて調査した。⁷ さらに佐賀県においては、伊勢参宮記念物（伊勢講碑）の分布、時代等の調査を行った。

③近代における伊勢参宮の時代的変遷の背景を探るために、近代の神宮大麻頒布制度の調査を行った。

〔研究成果〕

『神道宗教』240号平成27年10月

「近現代における伊勢信仰研究への視角—参宮と奉賛をめぐって」パネル発表要旨

櫻井治男「御師制度廃止後の伊勢信仰研究の諸課題」

八幡崇経「九州北部における伊勢信仰の近代—内宮旧師職資料の分析から—」

〔学会発表〕

八幡崇経「九州北部の伊勢参宮記念物に見る伊勢信仰の変化」(第69回平成27年度神道宗教学会学術大会、平成27年12月5日、國學院大学)

研究メンバー

櫻井治男（研究代表者、皇學館大学文学部 特別教授）

齋藤 平（研究分担者、皇學館大学文学部 教授）

谷口裕信（研究分担者、皇學館大学文学部 准教授）

八幡崇経（研究協力者、呼子八幡神社宮司）

濱千代早由美（研究協力者、帝塚山大学・奈良大学・日本福祉大学非常勤講師）

⁷ 福岡県博物館協議会・福岡県立美術館『福岡県の絵馬』1-4集平成9～12年